

臨 床

腰部ノシユナツペンニ就テ (演説)

醫學博士 林 喜 作

指節、股關節、膝關節部ニ於ケル、シユネルレン、ヒユツペン或ハシユナツペンスル疾患ニ關シテハ、已ニ人々ノ注意ヲ喚起シ、其本態及療法ニ就テモ漸次闡明トナルニ到レリ。余ガ報告セントスルハ、腰部ニ於テシユナツペンスル雜音ヲ發スル疾患ニシテ、未ダ記載セラレタルヲ聞カズ、余モ亦初メテ遭遇シタル疾患ナルヲ以テ、其觀察シ得タル諸點ニ就テ述ベントスルモノナリ。

患者、K Y、二十二歳、女性。

生來健全ナリシト云フ、大正十二年十一月踏ミ過リテ椽ヨリ落ち、腰背部ヲ擦リ且打撲シタリ、疼痛ハ腰部ニ來シタルモ、臥床スルニ至ラズシテ漸次輕快シタリ、然レドモ此ニ引續キテ腰部ニ倦怠ノ感アリ、負傷後一ヶ月程經タル時軀幹ヲ前屈スル際ニ偶然腰部ニ異様ナル雜音ヲ感知シタリ、其後腰部ノ倦怠ノ感ハ依然トシテ去ラズ、遂ニハ不快ヲ覺ユルニ至レリ、斯ル際ニハ身體ヲ屈伸シテ其際シユナツペンセシムル時ハ爽快ヲ感ズルヲ以テ、一日幾回トナク試ミ、漸次シユナツペンセシムルコト巧妙トナレリ。

大正十三年八月十日來院、骨格筋肉發育中等度ニシテ、頭部、胸部及四肢ニ異狀ヲ認メズ、起立位ニテ背部ヨリ觀ル。軀幹ハ少シク前屈シ右側ニ傾ク故ニ右ノ胸側上肢間三角ハ左ニ比シテ幅廣シ、脊柱ハ胸腰部ニテ左突側彎ヲ呈シ且輕ク

後彎ス、胸椎ノ生理的彎曲ハ減少シ腰椎下部ハ前彎ス、左肩胛骨下ヨリ第一腰椎ノ高サニ於テ左濶背筋ニ當ル部ガ右側ニ比シテ肥大シ隆起セルヲ認ム、今患者ヲシテ前屈運動ヲ徐々ニ行ハシムル時ハ脊椎ハ異狀ナク弓狀ニ彎曲ス、唯第一、第二、腰椎ノ棘狀突起ハ隆起少シク大トナルガ如シ、此部ハ叩打ニヨルモ壓迫ニヨルモ疼痛ナシ。此際注意スベキハ此腰椎ノ棘狀突起ノ左側ニ沿フテ第四腰椎ノ邊迄強キ筋肉ノ隆起ヲ認メラル、幅約一、五糎、長サ約十糎ナリ、再ビ徐々ニ起立セシムル時ハ此等ノ隆起ハ全ク消失ス、更ニ軀幹ヲ背屈セシムル時ハ前述ノ第一第二腰椎棘狀突起ノ隆起モ全ク消失ス、即脊柱ハ何レノ部ニモ強直ヲ認メズ且平等ニ運動ヲ營ムヲ見ル。軀幹ノ傾斜運動ヲ行ハシムルモ左右平等ニシテ旋轉運動亦異狀ヲ認メズ、即以上ノ觀察ニテハ吾人ハ何等ノシユナツペンシル雜音ヲ感知スルヲ得ズ、今患者ニ雜音ヲ發スル如ク命ズ。

患者ハ先ヅ起立位ニテ腰椎ヲ強ク展伸背屈シ、次ニ少シク上體ヲ右ヨリ左ニ旋ル如ク急激ニ強ク前屈ス、其際特有ノシユナツペンヲ聞ク、同時ニ腰椎ノ左側ニ沿フテ縱ニ走ル隆起ヲ認メラル、起立セシムレバ、此隆起ハ再ビ消失ス、今手ヲ此隆起物ノ出現スル部ニ當テ同様ノ運動ヲ反覆セシムル時ハ明カニ彈撥シテ突出シ振動ヲ感知ス。

即、此シユナツペンハ特種ノ運動ヲ急激ニ營ミタル際ニ來ルモノニシテ、患者ハ尙腹臥位ニテハ行ヒ得ザレドモ右側臥位ニテハ同様ニ行ヒ得、他働的ニハ如何ニ運動ヲ試ミルモ音ヲ發スルニ至ラズ。

八月十八日、腰部ノ筋肉ガ何處ニテカ其運動ノ際ニ障害抑止セラレ、夫ヲ越ユルニ際シユナツペンシルモノナンヲトノ想定ヨリ手術ヲ試ミタリ。

腹臥位ニテ局所麻醉ノ下ニ第一腰椎ノ棘狀突起ノ左側約二糎ニテ縱ニ約十五糎開キタルニ腰筋膜ハ何等ノ異狀ヲ認メズ、腰筋膜ヲ同様ニ開キタルニ、長背筋ハ縱ニ筋膜ガ離開シ、棘狀突起ニ沿フテ此ト平行ニ強キ腱ガ走レルヲ見ル、今シユナツペンシル運動ヲ營マシムル時ハ、筋肉ハ筋膜ノ離開孔ヨリ逸出セントシテ膨隆スルモ強キ腱ノ爲メニ壓迫抑制セラル。

今軀幹ヲ旋リテ、前屈ヲナス時ハ筋肉ハ腱ノ擒ハレヨリ放タレテ、飛ビ出シ來ル、其際シユナツペンスル雜音ヲ發ス、故ニ障害物ハ腱ヨリ成レルモノナリ卽長背筋ガ自己ノ筋肉ノ一部ノ腱ニヨリテ抑止セラレタルモノナリ。故ニ余ハ筋膜ヲ縫合シテ筋肉ガ再ビ飛ビ出サザル様セバ可ナラント思ヒ斯クシテ手術ヲ終レリ。

瘡面ハ直チニ治シタルモ疼痛ヲ訴ヘ前屈ヲ營マズ余モ亦前屈スベカラザルヤウ命ジ置ケリ。六週間後、疼痛去リ少シク前屈スルモシユナツペンナシ腰部ノ倦怠ノ感ハ尙去ラザルモ、漸次ニ治ス可キモノトシテ歸國セシメタリ。

十月三十日、再來、患者ハ腰部ノ倦怠ノ感ヲ訴フルコト舊ノ如ク、歸國後倦怠ノ感去ラズ以前ノ如キ運動ヲ試ミタルニ少シク音ヲ發シタリ然レドモ音ヲ發スル時ハ非常ニ快感ヲ覺ユルヲ以テ遂ニ復幾回モ試ミルニ至レリト余ノ面前ニテシユナツペンセシメ余ヲシテ啞然タラシム。余ガ試ミタル療法ハ遂ニ全ク水泡ニ歸シタリ、蓋シ當ヲ得ザリシモノカ、余ハ更ニ新ナル療法ニ就テ思考セザル可カラザルニ至レリ。

身體ノ諸部分ニテシユナツペン或ハシユナツペンスルコトハ屢記載セラル、内最モ多キハ彈撥指ト稱スルモノニシテ、余ガ觀察セルモノハ皆腱鞘炎ノ後ニ來リ炎症去リテ後、腱鞘ノ肥厚韌帶ノ短縮ニ因リテ腱ノ運動ガ窘束セラル卽彈撥ス、之ヲ反覆スル時ハ遂ニ腱ノ一部ハ結締組織樣ノ増殖ヲ來シテ肥厚シ愈彈撥ハ著明トナル、卽チ多ク記載セラル、ガ如ク初メヨリ腱ノ肥厚アリテ彈撥スルニアラズ腱ニハ何等ノ變化ヲ來ササル以前腱鞘ノ狹窄ニヨリテ來ルモノナリ、改ニ切開スル時ハ腱ハ全ク健康ナルモノ多シ而シテ其機械的障害及苦痛全ク去ラル。

彈撥膝ニテハ余ガ手術セル例ニテハ十字韌帶ノ弛緩ニヨリ膝關節ノ運動ニツレ半月狀軟骨ノ一部ガ脫臼スルニヨリテ來ル故ニ余ハ其切除ヲ試ミシユナツペンヲ去レリ。股關節部ノシユナツペンニ就テハ余ハ最近二例ヲ觀察シタルモ何レモ前二者ト異リテ苦痛ヲ訴フルコト少シ唯股腸筋ガ大轉子ヲ越ユル際ニシユナツペンス其發音ノ技術ハ皆甚ダ巧妙ニシテ自ラ其音響ニ對シテ不安ヲ抱キテ來診ス故ニ苦痛少キヲ以テ手術セルコトナシ。

余ガ述ベタル腰部ノシユナツペンニテハシユナツペンハムシロ快感ヲ覺ユルモ常ニ倦怠ヲ腰部ニ訴フ、少シク前屈シテ

勞役スル時ハ苦痛著シク堪ヘザルニ至ルト。

シユナツベンノメハニスムスハ前述ノ如ク長背筋ノ一部ノ筋肉ガ作キ腱ガ緊張シ此ニヨリテ他ノ部ノ筋膜ガ彈撥スルナリ、斯ク筋肉ノ一部ヲ緊張スルコトハ練習ニヨリテ自得シタルモノノ如ク其狀態ハ股腸筋ノ一部ノ緊張シテ股關節部ノ彈撥ガ成立スルト同様ニ説明セラル可キナリ、股關節部ノ彈撥ガ練習ニヨリテ得タル技術ト認メラルルガ如ク此患者ニ於テモ其練習ガ斯ルシユナツベンヲ來スニアヅカリテ力アルハ明カナリ、即外傷ニヨリテ長背筋ノ一部筋膜ニ離開ヲ來シタルモ偶々腰部ニ於ケル倦怠異和ノ感ハ自ラ腰部ノ種々ナル運動ヲ試ムルニ至リ遂ニシユナツベンヲ習得シ夫ガ爽快ヲ感ズルニ至リテ反覆益々其技術ヲ進メタルモノノ如シ。

僅カニ一例ナリト雖モ本會ニ於テ初メテ報告シ得タル光榮ヲ擔ハントス。

追記、本患者ハ尙治療ヲ繼續中ニテ、固定綑帶ヲ試ミ輕快セザル時ハ更ニ障害トナル腱ノ切斷ヲ行ハントス。

關節ノ強直ト攣縮(臨床講義)

Ankylose und Kontraktur des Gelenks (Klinische Vorlesung)

Von Prof. Dr. HIROMU ITO.

Zit. n. Dr. S. Ogai, Assistenten der Klinik.

Orthopädische Abteilung der Kaiserlichen Universität zu Kyoto)

京都帝國大學教授

醫學博士

伊藤

弘講

醫學士

都谷枝萬次郎記